

お通しはお前の全部だ
～閉店後の居酒屋でカ
ントがバレた常連客の
話～

「っ……ん、う……っ♡」

カウンターに突っ伏したまま、肩が震えている。涙が止まらない。酒の味もう分からない。四杯目の猪口を倒して、冷酒が木のカウンターを濡らしていくのをぼんやり見つめていた。

——お前、本当は女なんじゃないのか。

上司の笑い声が、まだ耳の奥にこびりついている。

「今日はもう閉めるわ」

桐島さんの低い声が、残っていた二人連れに向けられた。ガタガタと椅子が鳴って、「おやすみー」と間延びした挨拶が遠ざかる。暖簾を下ろす布の擦れる音。鍵の回る、硬い金属音。

店内が、しんと静まった。

「……泣くなら、せめてつまみ食ってからにしろ」

その声に、余計に涙が溢れた。

誰かに——こんな風に気にかけてもらうことに、僕は全然慣れていない。

「こっち来い。客に泣き顔見せたくねえだろ」

腕を掴まれて、カウンターの向こう側に引きずり込まれた。厨房を抜けた奥、食材の搬入口の横。パイプ椅子が二脚だけの小さな休憩スペース。

「座れ」

言われるまま座ると、桐島さんはもう一脚の椅子には座らず、壁に背を預けて僕を見下ろした。腕まくりした太い前腕を組んで、何も言わずに、ただ待っている。

「……上司に」

声が震えた。

「お前、女みたいな顔してるな、って……飲み会で。みんなの前で」

桐島さんは黙っている。

「本当は女なんじゃないかって……笑われて……」

（冗談だったんだろう。あの人たちにとっては、ただの酔った冗談。でも僕にとっては）

「……それが、何だってんだ」

桐島さんが壁から身体を離して、僕の前にしゃがんだ。大きな手が僕の顎を掴んで、強引に上を向かされる。涙でぐちゃぐちゃの顔を、真正面から覗き込まれた。

「お前の事情なんか知らねえよ。ただ——」

顔が、近づいてくる。日本酒と出汁の匂いが混ざった吐息が唇にかかった。

「半年も通ってくる奴が、こんな顔するのは、見てらんねえ」
——唇を、塞がれた。

「んっ……！♡」

酒の味がした。桐島さんの舌に押し込まれた自分の酒の味と、桐島さん自身の味。混ざって、頭がくらくらする。

太い腕が背中に回されて、パイプ椅子ごと引き寄せられた。身体が自由が一瞬で奪われる。

「ん……ッ♡ んん……っ♡♡ きり、しまさ——んう……っ♡♡」

舌を絡め取られる。深い。息ができない。鼻から抜ける息がひゅうひゅう鳴って、涙と鼻水でぐしゃぐしゃの顔のまま、ただ口の中を蹂躪された。

——そのとき、桐島さんの膝が、僕の股間に押し当てられた。

ぐ、と。

「ッ……♡♡」

硬い膝頭が、スラックス越しに僕の——そこを、押す。

男なら、硬いものが当たるはずだ。でも当たらない。膝が触れたのは、柔らかくて、割れていて、布越しにも分かってしまう——

桐島さんの動きが、止まった。

唇が離れる。銀色の糸が一瞬だけ繋がって、切れた。

「……お前」

低い声。さっきまでの、客をあしらう軽い声音じゃない。もっと深い、腹の底から出る声。

僕の顔から血の気が引いた。

酔いが、一瞬で覚めた。

バレた。

「ち、違——」

「違わねえだろ」

桐島さんの膝が、もう一度ゆっくり押し当てられた。今度はさっきより丁寧に。確かめるように。柔らかい裂け目の輪郭を、膝頭でなぞるように。

「ひっ……♡♡ やめ……っ♡」

「……へえ」

桐島さんの目が変わった。

さっきまでの面倒見のいい兄貴分の目じゃない。獲物を見定めた獣の目。細く、暗く、熱い。

「こういう身体だったのか。三上」

椅子から立ち上がろうとした。逃げなきゃ。ここにいちや駄目だ。

肩を掴まれて、パイプ椅子に叩き戻された。

「逃げんなよ」

「っ……離して……っ！」

「お前、半年もここに通ってたのは、俺に見つけてほしかったんだろ」

「そんなわけ——」

「じゃあなんで、毎週毎週、わざわざこんな狭い店の端っこに座りに来てた？」

——答えられなかった。

（違う。そんなんじゃない。ただ、ここが……桐島さんの店が、唯一、僕が自分でいられる場所だっただけで——）

（……それって、結局同じことなんだろうか）

桐島さんが僕の前に膝をついた。さっきキスされたときと同じ姿勢。でも目の色が、全然違う。

「確認させろ。お前が何を隠してたのか——俺のこの手で確かめてやる」

「やっ……やめて桐島さん……っ♡♡ お願い、それだけは……っ！」

ベルトに手がかかった。僕の手で押さえたけど、桐島さんの手首は太くて硬くて、指が回りきらない。あっさりと引き剥がされて、カチャリ、とバックルが外れる音。

ジッパーがゆっくり下ろされる。

「っ……♡♡」

スラックスの前が開いて、下着が露わになった。蛍光灯の白い光が、休憩スペースの狭い空間を容赦なく照らしている。

桐島さんの指が——太くて長い、料理人の指が——下着の上から、僕の股間に触れた。

「ふッ……♡♡」

なぞられる。縦に。ゆっくりと、一本の指が布越しに割れ目の形をなぞっていく。

「……マジかよ」

桐島さんの声が低く震えた。嫌悪じゃない。その声には——渴望が、滲んでいる。

「ちんこがねえ。代わりに……こんな柔らかいモンがついてやがる」

「やめてっ……♡♡ 言わないで……っ♡♡」

指が割れ目を上から下まで辿る。布越しなのに、形がはっきり分かってしまうくらい丁寧に。

「っ……やめ……桐島さん、お願い……触んな——ッ♡♡」

「お前、ここ、もう濡れてるぞ」

「っっ！！♡♡」

（嘘……っ♡♡ さっきのキスで……膝で押されたので……もうそんなに……っ）

桐島さんの指が下着の上から割れ目に押し込まれた。布がぐにゅ♡と沈んで、カントの輪郭がくっきり浮かぶ。

「隠しきれてないだろ、これ」

指先が上の方に移動して、小さな膨らみを捉えた。

「クリが勃ってるのまで分かるぞ」

「あ……っ♡♡ そこ、触らな——ッ♡♡」

布越しにくりくり♡くりくり♡と、クリトリスが転がされる。桐島さんの指の腹は硬くて分厚い。包丁を握り続けてきた料理人の指。そんな指にデリケートな突起をこねくり回されて——

「ひんっ♡ あっ♡ やだっ、やめっ……♡♡ やあッ♡♡」

「嫌ならなんで腰、動いてんだよ」

はっとして視線を落とすと、僕の腰が勝手に桐島さんの指に擦りつけられていた。へこへこ♡へこへこ♡と浅ましく腰を揺すって、自分から気持ちいい場所に指を誘い込んでいる。

（うそ……やだ……勝手に動いて……っ♡♡ 男なのに、こんな……っ♡♡）

「ッ……♡♡ ち、違っ……身体がっ、勝手に……っ♡♡」

「勝手になんか動かねえよ。お前の身体が俺の指を欲しがってんだ」

布越しの刺激がもどかしい。じわじわと下着に染みが広がっていくのが分かる。愛液が後から後から溢れて、桐島さんの指を濡らしていく。

「脱がすぞ」

「やだっ……♡♡ 桐島さん、待って——」

返事を待たず、下着に指をかけられた。スラックスごと一気に膝まで落とされて——

蛍光灯の光が、僕のカントを直接照らした。

「っ……♡♡♡」

(見られてる……♡♡ 桐島さんに、全部……♡♡♡)

恥ずかしくて脚を閉じようとしたけど、桐島さんの広い肩幅に阻まれて閉じられない。パイプ椅子の上で膝を開かされたまま、愛液で濡れてつやつや光るカントが、桐島さんの目の前に晒された。

「……きれいなもんだな」

桐島さんが息を吞んだ。料理人の目だった。上等な食材を前にしたときの、あの真剣な目。

「味見してやるって言っただろ」

指がカントの割れ目に直接触れる。ぬるっ♡と愛液で滑って、太い中指が裂け目の間に沈んだ。

「あぁッ♡♡ ——っ、直接、だめ……っ♡♡♡」

「料理人はな、素材をよく見るんだよ。色、艶、匂い——全部確認する」

指が割れ目を左右にぐぷ♡と開いた。中のピンク色の粘膜が蛍光灯に照らされて、とろとろの愛液に濡れて光る。

「見るなッ……♡♡ そんなとこ、開くなぁ……っ♡♡♡」

桐島さんが顔を近づけた。鼻先がカントの数センチ手前まで迫って——匂いを嗅いでいる。

「いい匂いだ。酒と、お前の匂いが混ざってる」

(嗅がれてる……♡♡ あそこの匂い……桐島さんに……っ♡♡♡)

恥ずかしすぎて頭がおかしくなりそうだった。

中指の先端がカントの入り口を、くるり♡くるり♡となぞる。入り口の周りをゆっくりと。中には入れない。焦らすように。

「ひっ……あっ♡♡ ……入れるなら、早く……っ♡」

口が勝手に動いていた。言った瞬間、自分の耳が信じられなくて——

「何を急いでんだ」

桐島さんが笑った。獣の目のまま、口の端だけで。

「仕込みは丁寧にやるもんだ」

親指の腹がクリトリスに乗った。円を描くようにゆっくり、ぐるうり♡ぐるうり♡と撫で回される。もう片方の手が太腿の内側を這い上がって、柔らかい皮膚を指先でくすぐる。

「ひうっ♡ あっ♡♡ んん……っ♡♡♡ くり、触りすぎ……ッ♡♡」

クリトリスを回す指のリズムが少しずつ速くなる。親指の硬い腹が突起を押し潰すように圧をかけて、次の瞬間ふっと離して、また押し付ける。

「あっ♡ あっ♡ あっ♡♡ やだ♡ 桐島さ——ひあッ♡♡♡」

中指がようやく入り口に沈んだ。第一関節まで。